

---

depot 水樹 裕編

水樹裕

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

depot 水樹 裕編

### 【Nコード】

N6413A

### 【作者名】

水樹裕

### 【あらすじ】

十八歳の夏休み、田舎の祖父母の家に遊びに来ていた頼たのは、いざ、家へ帰ろうとするが……。【一夏の不思議ミステリー？】

(前書き)

同じ設定、同じ登場人物で短編を書こう！ という企画「グループ小説」第四段です。「グループ小説」で検索すると他の先生方の作品もご覧になれます。ぜひ、どうぞ！  
ちなみに、depot 駅 という意味です。

俺の名前は、飯井 頼（いいいいらい）。

ひらがな二文字しか使わない、実に珍しい名前だが、それに付いては深く言及するのは避けておく。

『頼』 と言う名前は、結構気に入っているが、『飯井』 と言う名字とセットになると、ちょっと微妙なのだ。

この年、十八歳の夏、俺は高校の夏休みを利用して、東北にある父方の祖父の家に、恒例の『ジーちゃん家お泊まりツアー』 に来ていた。俺の命名主の、ジーちゃんの家だ。

東京から、JRの電車を乗り継いで、更に単線のローカル線に揺られて、田んぼの中の無人駅にやっと到着する。そこから徒歩で三十分。ちょっとした旅行気分だ。

小学六年生までは、両親と三つ下の妹と毎年訪れていたのだが、父親が脱サラして『お袋さん』 と言う弁当屋を初めて忙しくなつてからは、俺一人で訪ねるのが、恒例となっていた。中学一年生の時、初めて一人で辿り付いたときは、『ああ、俺って大人！』 と妙に嬉しかったものだ。

空気も美味しいし、こっちの人達は、実に人間味があつて温かい。誰その子供だ、孫だと教えると、すぐ縁側にスイカだのトウモロコシだのが並ぶ。都会の喧噪に疲れた俺には、憩いの場所なのだ。（なんて、たかだか十八年しか生きていない若造が言うことじゃないけどね）

「じゃあ、バーちゃん。又、冬休みに来るよ！」

「ああ。楽しみにしているよ。頼も、体に気を付けて。ああ、これ、お稲荷さん作ったから、電車の中で食べなね」

バーちゃんのいなり寿司は、母親の作るのとは味が微妙に違う。もっと、甘くて、しょっぱい。俺の『田舎の味』だ。いつも帰り際に持たせてくれるこの『お稲荷さん』を帰りの電車の中で食べるのも、楽しみの一つだった。

「サンキュー、バーちゃん」

「おおーい。車がパンクしとるよ！」

駅まで送ってくれようと、広い敷地の西側にある車庫に軽トラックを取りに行っていたジーちゃんが、慌てた様子で駆けて来る。脇にバーちゃんの赤い自転車、いわゆる『ママチャリ』を引いている。

「時間に間に合わんといかんから、バーさんの自転車を乗って行け。駅に置いておけば、後で取りに行くからな。」

しかし、今朝までは何ともなかったんだがなあ……」

「大丈夫だよ。自転車なら十分間に合うから。じゃあ、借りて行くよ」

そう言って、俺がママチャリに跨った瞬間、ポツリ、と水滴が鼻の頭に降って来た。

「あれ？」

一瞬、鳥の糞でも落ちて来たかときよっとして、鼻の頭を拭いながら空を見上げる。

ポツリ、ポツリ ぽつぽつぽつ。

雨だった。午後二時の夏の空は、晴れて澄み渡っている。なのに、なぜだか雨が降っている。

「ありゃあ！？ お天気雨だわあ！ 傘、傘！」

今度は、バーちゃんが慌てて母屋に傘を取りに行くのを、俺は何となく釈然としない気持ちで見っていた。

「んじゃあ、自転車と傘、借りて行くよ」

「ああ、気を付けて行くんだよ！」

心配げにいつまでも手を振っている二人に、借りたジーちゃんの黒いこもり傘を持つ手を、掲げて別れを告げた。

古びた赤いママチャリに、黒いこもり傘。なかなか素敵なお出立ちだが、気にしてる場合じゃ無い。急がないと、真面目に電車に乗り遅れてしまう。乗り遅れたら、次は一時間後。JRの乗り換え時間にも、全部間に合わなくなってしまう。俺は、無人駅に続く田んぼの中の真っ直ぐな砂利道を、軽快に飛ばしていた。

五分ほど経つたろうか、突然、ハンドルが右に取られて倒れそうになった。がたがたと自転車が今までと違う振動をする。

「あれ？」

降りて前輪を確認すると、タイヤにぶつ太い五寸釘が刺さっていた。

「何で、こんなトコに五寸釘？」

悩んでる暇はない、とハタと気が付く。とにかく釘をぐりぐりとこじりながら引き抜いた。思わず、抜いた釘とぺしゃんこになったタイヤを見比べて溜息を付く。

今日は、厄日なんだろうか？

ブルブルと頭を振る。気弱になっている場合じゃ無い。俺は、急がなくてはならないんだ！

俺は、パンクしたママチャリに跨った。相変わらず天気雨は降っていたが、構わず傘を畳んで前かごに突っ込む。本当なら、パンクした自転車で走って走る様な真似をしてはいけない。増して、ここは舗装されていない砂利道。パンク修理で済む物を、下手をしたらホイール交換しなければならなくなるのだ。

「バーちゃん、ゴメンよっ！ 後で、バイト代入ったら、新しい自転車買っからね！」

俺は、がたがたと、もの凄い振動をする暴れ馬の様なママチャリを、一心不乱にこいでいた。遠くの田んぼの真ん中にポツリと建った、無人駅の青いトタンの外壁が見えて来る。

プオー！

電車が警笛を鳴らしながら、ゆっくりと駅に停車する。

やった！ ぎりぎり間に合う！！

そう思った瞬間、がちやりと言う嫌々な音と共に、ママチャリがスーッと止まった。

「……やっぱり、今日は厄日だ……」

ママチャリのチェーンが、何故かブツツリと切れていた。外れたんじゃない。見事に切れていたのだ。

俺は、定時で発車して行く電車を恨めしげに見送った。

乗り遅れてしまった物は仕方がない。今更慌ててみた所でどうしようもない。俺は、携帯電話のアラームを五十分後にセットし、三畳ほどの広さの駅舎のベンチで、午後の昼寝としゃれ込む事にした。幸い、ここは無人駅で滅多に乗客が来ない。俺はデイ・バックを枕に、うとうとと眠りの中に落ちて行った。

夢を見ていた。

白い子犬と遊んでいる、幼い自分。

夏になるとお祭りがある山向こうの神社。そこで飼われていた白い子犬。

「おいで！ ほら、こっち！ こっちだよ！」  
楽しかった。

黒い大きな瞳の、真っ白な子犬。

体に似合わぬ大きなふさふさした尻尾が、跳ねるたび、ふわりと宙に舞う。

ちりん、ちりん、と俺が首に付けてあげた小さな銀の鈴が、澄んだ音を響かせる。

「おいで……。こっちだよ」

俺は、その自分の声で目を覚ました。

はっとして、腕時計を確認する。眠り始めて三十分ほど経ってい

た。

くすくすくす。

その声にぎよっとして周りを見回すと、隣に女の子が座っていた。年は、多分同じくらい。

白いワンピースの、色白の女の子。長いストレートの明るい茶色の髪が、夏の日差しに透けて金色に見える。

真っ黒な、大きな瞳が、楽しそうに俺を見つめていた。

「あ、ああ！ すみません！ 人がいるなんて思わなかったの！」

がばつと飛び起きて、あたふたと身繕いをする。

「いいんです。気にしないで下さい」 そう言って又笑う。

「あの、俺、何か寝言、言ってますでしたか？」

「少し」

「あ、あはははっ」

これは、付いている部類に入るのか、入らないのか複雑な気持ちで俺は頭をかいた。

「あの、こちら辺の人じゃないですよね？」

何か話題を振らねばと、当たり障りの無い話を振ってみる。

同じ地区の同じ年頃の間人は、さほど多くはない。彼女の顔には見覚えが無かった。それとも、俺と同じで、親戚の家に遊びに来ているのだろうか？

「私は、山向こうに住んでるんです」

「山向こうってというと、峰岸神社のあたり？」

「ええ」

「へえ。あそこの神社のお祭り、毎年行くんですよ。今年も行って来ました。もしかしたらすれ違っているかも知れないですね」

「ええ」

にこにここと相づちを打つ彼女を見ていたら、何故か夢に出てきた白い子犬を思い出した。

白い子犬？ 峰岸神社？ 夏祭り？ あれ？

何か心に引つ掛かった。

あの白い子犬。名前、なんて言ったっけ？

いつの間にか居なくなっていた、白い子犬。

シロ？ チロ？ コロ？ チビ？

「ジユン」

「は！？」

「私、<sup>ジユン</sup>巡と言います」

一瞬、白い子犬の名前を言われたのかと驚いたが、彼女の名前だとすぐに飲み込む。

「あ、俺は、頼。飯井 頼と言います」

彼女がクスリと笑った。まあ、大抵の人間は、俺が名乗ると、驚くか笑うかする。仕方が無い。

「ああ。雨、止んだんですね。変な雨でしたね。雨雲なんて無いのに降るなんて」

「狐の嫁入りって言うんですよ。ああ言うお天気雨のこと」

「へえ。そうなんですか」

その時、ぐう、と彼女のお腹が鳴った。

「ご、ごめんなさい！」

白い顔を真っ赤に染めて彼女がうつむく。俺は、バーちゃんの『お稲荷さん』の入ったタッパーを、デイ・バッグから取り出して彼女に勧めた。

「良かったら、どうぞ。祖母の手作りなんです。ちょっと味が濃いかも知れないけど、美味しいですよ。俺も小腹が空いたので、ちょ

うど良かった」

若い女の子に、手づかみの物を進めるのはどうかとも、ちらっと思ったが、彼女は、嬉しそうに顔をほころばせて、いなり寿司を一つ手に取った。

「頂きます」

美味しそうにパクツと一口頬張る。

「美味しい……」

「それは良かった」

俺も、ぱくぱくと、いなり寿司を口に運ぶ。

甘くて、しょっぱいバーちゃんの味が、口いっぱい広がる。

その時、俺の携帯電話が鳴った。

俺は残りのいなり寿司を口に放り込むと、携帯の着信表示を確認する。ジーちゃん家からだった。

「あ、ちよつとゴメン」

彼女に断って、駅舎の入り口に歩きながら電話に出る。何か、

忘れ物でもしたかな？

「はい。もしもしー」

「あんた、生きてるの!？」

むぐむぐと、必死にいなり寿司を飲み込む俺の耳に、大音量のバーちゃんの声が響き渡った。

その迫力に、思わずご飯が鼻に逆流して、ぐほつとむせる。

「な、何だよいきなり!?! ビックリしたなあ」

「いきなりも何も、頼! あんた無事なの!？」

「はあ？」

「だって、あんたが乗った電車、脱線事故で怪我人が一杯出てるって、テレビでニュースやってるよ!!」

え？

ごちそうさま。

お気を付けてお帰り下さいね。ライ。

彼女の、巡の声が聞こえた。  
いや、声じゃない。

心に、直接流れ込んだメッセージ。

座っていた筈の場所に彼女の姿が無い。

三畳の狭い駅舎。俺はその入り口に立っていたのだ。彼女が出ていけば、気が付かない筈がなかった。

ケーン！

甲高い獣の鳴き声が、何処までも続く田園の中に木霊する。

振り返る俺の目に映ったのは、緑の稲穂の中に、ぽーんとトンボを切る白い獣の姿。

白いふさふさとした大きな尻尾が、ふわりと宙に舞う。

細く長く伸びた鼻筋。

「白い、狐？」

ちりん。と俺の足下で鈴が鳴った。

左のつま先に落ちている、小さな古い銀の鈴。

それを手に取り、くるくると回す。

「あー！」

その鈴の裏側には、見覚えのある下手くそな自分の字で、『巡』と書かれていた。

「助けに来てくれたのかな？」

自動車のパンクに、天気雨。自転車の五寸釘に、チェーン切断。

さぞ、孤軍奮闘してくれたであろう、白い獣の姿が思い浮かんで、思わず、クスリと笑いが漏れた。

今度来た時は、バーちゃんの『お稲荷さん』を神社にお供え

に行こう。

それは、俺が経験した、ちょっと不思議でおかしな、十八歳の夏の出来事。

おわり

(後書き)

ジャンルは、ファンタジーにしてみました。

前回は、結構長い話しになってしまったので、コンパクトに纏めて  
みましたが、いかがでしたか？

少しでも楽しんで下さったのなら、嬉しいです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6413a/>

---

depot 水樹 裕編

2008年11月7日08時38分発行